
† MARIA †

魅朱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

†MARIAT

【Zコード】

Z5703D

【作者名】

魅朱

【あらすじ】

妖”アヤカシ”が見える僕は”マリア”と言われる特殊な人間らしい。僕を守る騎士”チエン”の双子。飛鳥と疾風に出会う。これから僕の日々は180°。変わり始める。

出会い

梅雨時の6月中旬。

普通はこんな中途半端な時に転校生なんて来ないはずだ。

そう・・・普通は来ないはずだ。

なのに・・・なんで・・・。

僕は、古坂琴希（コサカ クニキ）。

女顔で身長だって小さいし、小柄すぎて困る。

体力だって平均、ぐぐぐく普通の中学一年だ。

特技はピアノ。

困っていることが一つ・・・

この世のものじゃないものが見える。

俗に言つて”幽霊”がみえる。

けれど、それでは何人か身の回りには居る。

僕は”幽霊”以外に妖（アヤカシ）と言われるものが見える。

妖は、人の嫉妬、恨み、悲しみ、怒り・・・。

人の感情のせいで生まれてしまう。

この妖のせいで、僕の友達や母さんは死んだ。

こんな考え方をしていたら急に背中を叩かれた。

「前、前を見なさい！！」

後ろの席の浅地が小さな声で呼びかけてきた。

「う、うん・・・。」

「今日は休みはないよな？よし！いきなりだが転入生を紹介する。」

「

野太い声で怒鳴つてるのは、真田先生。

女子からは”ダサ先”と言われているらしい。

まあ、僕は興味ないけど。

”転入生”って聞くとみんなテンションが上がるのか

なぜか盛り上がりがっている。

そこまで盛り上がる・・・?

「おい！入れ！」

入ってきたのは、髪の長い美少女と僕と同じ女顔の美少年。

「ほれー自己紹介！」

美少女は泣々と低い声で自己紹介を始めた。

「ええ～と・・・初めて。霧冥疾風です。よろしくお願いします・・・。」

霧冥疾風（キリミコウハヤテ）・・・。

変わった名前だな・・・。

次は美少年が声変わりをしてない高い声で自己紹介を始めた。

「初めまして。霧冥飛鳥です。よろしくお願いします。」

最後に満面の笑みを浮かべた。

霧冥飛鳥（キリミコウアスカ）と霧冥疾風（キリミコウハヤテ）・・・。

これが僕と飛鳥と疾風の出会いだった・・・。

告げる人

疾風「アンタ、妖が見えるでしょ？」

「えつ！」

飛鳥と疾風が転入してきた日。

僕は疾風＆飛鳥に屋上に呼び出された。

そして・・・こんな展開に・・・。

ハア～・・・。まったく何なんだ？僕の人生は？

疾風「でも、珍しいわね。男の”マリア”なんて。」

「え？”マリア”ってなに・・・？」

飛鳥「え？」

疾風「ハア～・・・。」

僕が聞き返したら飛鳥君は驚いていて、

疾風さんには呆れられた。

飛鳥「あのさ・・・。古坂くん。マリアってのはね。」

疾風「マリアは妖、幽霊が見えると同時に”猿”を引き寄せるの。

わかった？」

飛鳥「それで僕らは・・・」

疾風「騎士” チェン” つ言つアンタを守るもの。」

「は、はあ～・・・そ、そうですか。」

さつぱり分からん。

何？チエングって？

マリア？猿？

”ふざけんのも対外にしろ！！”と

一人に怒鳴りたかった。

疾風「まつそう言つことで。」

飛鳥「頭に少し入れといでね。あとね・・・」

疾風「夜の学校には絶対入るな。」

飛鳥「入つたら永遠に出て来れない。」

「さう言つことだよ。」

二人は双子のように息がピッタリとそう言った。

そう言い残すと一人は屋上を後にして言つた。

「何・・・。あの二人・・・。」

”マリア”・・・。

きっとこれは僕の・・・僕たちの逃げられない定めなんだろ・・・。

この時を境に僕らの運命は180°。変わり始めた。

告げる人（後書き）

飛鳥＆疾風は何者なのかは次回で分かるはず・・・。

飛鳥と疾風。

「どうしよう……。」「

ヤバイ……ヤバイよ……。

学校に宿題を忘れた……。

今の時刻は午前2時。

簡単に言えば「丑三つ時」ってやつ。

だからと書いて先生に『すいません…宿題忘れました』なんて言つたら…。

ああ～数学の岡田センセに笑顔で殺される～（ -.- ） -.-

「学校に忍び込むか…」

これがTV番組だったら画面下に「よに子は真似しないでネー！」って出てるんだろうな～。

なんて思いながらじめじめした空氣の中を自転車で走っていく。

この後に起る」とも知らずに…

カツカツカツと上履きで夜の学校へ進入。

バレたら完全校長室に行きだ……。

「サッサと宿題持つて帰ろ・・・。」

教室に向かうべく足を速めたそのとたん・・・。

後ろに気配が・・・。

この気配・・・妖や靈のものだ・・・。

覚悟を決めて後ろを振り向くと・・・。

ドロッとしたものの姿があつた・・・。

僕に覆いかぶさつてくるーー！

ヤバイ！！

「伏せろ！——琴希！」と伊勢のいい声のが叫ぶ。

声は分からぬいけど、叫う通りにしてみた・・・。

助かるために・・・。

バンバン！と銃声が聞こえ・・・。

「あ・・・くん・・・！」・・・と・・・琴希君？

目を覚ました僕の前には飛鳥＆疾風の姿があつた。

「な・・・なんで・・・?」

「何でつてアンタを守る為でしょうが。」

「あれ……僕。血口紹介した?」

だつて転入して1日目だし、屋上で話した時は“あんた”だつたのに……。

『そんなの調べた。』あつ。またハモつた。何?双子……じゃないよね。

顔、全く違うし。

「2人はどんな関係なの? 恋人同士?」

助けて貰つたのにこんな事言つのは……ダメなんだろ。

でも……かなり気になるんだよオオオオ!!--

力チャヤ。と銃が僕の頭に当てられる。

「あれ?此処にバカがいるよ。こいつらは“殺さなくちゃ”ね。

」

「言わねえよ……しかも殺そつとするな!--

「おお~。琴希君、ナイスツッ!//!!--」

飛鳥君が驚き、疾風さんが拍手する。

「で、お2人の関係は？」

「僕らはねえ〜……」

「飛鳥。勿体ぶらんでいい。」

「エヘヘ。簡単に言いつと」

「『双子』だよ」

双子

「エッ……（絶句）」

だこて！だこて！

飛鳥君は男だし、疾風さんは女だし！！

信しられなしみたしな
・
・
・
・

二二二

「…・・・嘸はしかんよお一人わん」

万々外
見事は儲してないわね

そりゃ信しないさ!!

顔は少し似てるなとは思うけど性格が正反対だし、もう絶対双子じゃないよー！

「琴希君、
一卵性双生児
」って知ってる?」

「うん。聞いた」とせある。

「あたしらはそれ。」

「証拠を見せる前に」

「『あれ』を消しちゃね! もちろん!」

疾風さんがニヤッと笑つ背後では黒い陰が蠢いていた。

「アレ、水属性だね。」

飛鳥君がポツリと呟く。

「嗚呼、面倒な奴と当たつちまた。」

「どうする? 琥塔君居ないよ。」

「ん? 琥塔君??

「まあな。頑張るしかねえんだろ。」

「ちよつと待つてー!」

「何よー! サッサと書つてー!」

「琥塔君って……琥塔鈴架さん?..」

「知つてんの?..」

「ええ~と……その……」

琥塔鈴架さんは僕の先輩に当たる生徒会長さん……

ちなみに男。 . . . 。

「何か、僕を読んだかな？」

朝の朝会で聞き慣れている生徒会長さんの声が背後で聞こえた。

「あつやー・・・尊をすうじー・・・」

「てかなんでいるんですかあ～？」

と同時に質問する飛鳥君＆疾風さん。

「うーん、どうが双子みたい……。」

疾風、飛鳥。1人ずつ話せ。

「ええう！！」と一人してブーイング。

「じゃあ僕からいいま～す！～」飛鳥君の声だし、飛鳥君の口調だった。

「あたしからじゃだめ？」これは疾風さんの声だつたし、疾風さん

だけど琥塔さんが言つたのは

「君ら、人の声の真似と口調を真似るな。」

「エッ！？」

どうやらこの二人は・・・・。

「あらう・・・。ダメだつたのかな?」

「いいじゃん。別に。」

「君達、いい加減にしなさい！」

「アーティストアカデミー」

床にぺたりと座っている僕のところに

疾風さんが歩いてきて、僕の肩に手を置きながら

僕の前に跪く。

間違えなく疾風さんだつた。

גַּעֲמָנִים

今度は飛鳥君が歩いてきて、疾風さん声＆口調で言つ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5703d/>

† MARIA †

2010年12月24日14時26分発行